

経験・理論・主張

高校生らしさを求めて

小川原正道

(慶應義塾大学法学部教授)

本コンテストでは今回から新たに自由課題を設けたこともあり、多岐にわたる分野について縦横に論じた、多数の力作が寄せられた。

もつとも高い評価を受け、小泉信三賞を受賞したのが問山論文である。デイスレクシアの当事者である著者は、福澤論吉の言葉を用いながら、自身が障害を克服する過程で経験した苦闘、ICTで広がった「わかりやすさ」、未来への意欲と期待を論じ、「公平なスタートライン」を保障する重要性を説いた。福澤の「実学」を自らの人生と文章に昇華させた、見事な作品だ。

次席の明樂論文は、「全知の無知」を論じた。AIが巧妙かつ広範に「唯一の正しさ」を決定する危険性を「全知の無知」だと喝破する著者は、思考様式の均質化・効率化、ファストフード化の危険性を指摘し、「永遠の訂正者」として生き、

「全知の無知」への誘惑と戦う必要を提示する。自らの哲学的思索の痕跡が明瞭に示されている。

佳作にも意欲作が並んだ。まず安藤論文は、環境問題への対応を遅らせる最大の要因を「自国第一主義」に見出して主権国家体制の何たるかを論じ、SNSなどを通じて構築される「わたしの集合体」に着目する。著者自身の行動に還元される結論は、高校生らしい若々しさに満ちている。

坂論文は、「加速こそ善」とする価値観・社会構造を問い直し、加速するなかで人間の判断や経験、熟慮、感受性が軽視されていると指摘し、熟成を重んじた上で、信頼や感謝、共感を制度的に評価する「共鳴資本」の導入を説いた。哲学的思考と自らの経験、文献が重層的に展開され、説得力を具備している。

竹縄論文は、ロシア音楽を愛好するという立場から、プロバガンダの観点でロシア音楽史を見直す。音楽と政治を別物と考えるべきではなく、音楽のもつ政治性を受け入れ、他国理解の一助とすべきだという主張は、二〇五〇年の国際社会のあり方に重要な示唆を与えてくれる。

原論文は、SNS社会での政治談義には「熟議」が見られないとして、SNSの特徴や「罨」、熟議民主主義の理念や実践について論じる。参加の「数」だけでなく対話の「質」が重要だとして「熟議の場」「熟議文化」を社会構造に組み込む必要を説いた点もまた、現代社会に重くのしかかる。

日垣論文は、衣装という視覚表現を切り口に「わかりやすさ」の価値と限界を論じ、それは「正義」ではないと論じる。「わかりにくさ」との両立を志向する著者は、視覚的包摂とユニバーサルデザインに、ひとつの解決策を見出している。問題意識と議論の展開が独自性に満ち、結論も説得力が高い。

小論文は論文である以上、科学的実証性を備えねばならず、資料やデータの裏付けは必須であるが、高校生には高校生自身の言葉で、自らの主張や意見、哲学や思索を語ってもらいたい。応募作には、引用文献に自説が埋もれてしまっている作品が少なからず見られたが、受賞作はこうしたバランスをとることに成功した例とも言える。ぜひその内容を読んでいただきたい。

第五〇回を刻む、 喫緊の課題と本質

こいだともこ
恋田知子

(慶應義塾大学文学部教授)

第五〇回という記念すべき節目に、高校生は何を問い、何に挑んだのか。

既定の五つの課題に加え、自由課題の設定により、現代的な関心と多様な視点が色濃く反映された作品が多数寄せられ、審査委員会を大いに喜ばせた。既定課題で応募の多かった「AIと人権」と「選挙とSNS」は、高校生が社会との接点として捉える喫緊の論点であり、次代の担い手としての意欲が印象に残った。

「AIと人権」では、次席の明楽和磨さんの論文が現代的なテーマと哲学的な問いを融合させた良作であった。AIが提供する「正解」の誘惑を拒否し、答えの出ない問いを抱え続ける「永遠の訂正者」として生きる姿勢こそが、「全知の無知」に対する人間的な抵抗であると主

張し、示唆に富んだ作品として評価された。「選挙とSNS」では、原夏希さんの論文が民主主義の質の維持のため、情報消費や共感ではなく、批判的な「吟味思考」に基づく対話の場を再構築する必要性を訴え、実行性の高い提言であった。

「二〇五〇年のわたしと国際社会」は特に良作に恵まれた。安藤千紘さんの論文は、環境問題を個人と国際社会の関係を問い直す契機とし、国家を越えた「わたしの集合体」の形成を推進する真摯な考察が光る。坂綾高さんの論文は、無制限な「加速」に異議を唱え、信頼や感謝を制度的に評価する「共鳴資本」の必要性を説き、持続可能な未来を見据える。竹縄智さんの論文は、音楽を他国の人々との相互理解を図るツールと捉え直し、音楽の持つ政治性や宗教性の受容を促す、思慮深い文化論を展開した。

「わかりやすさ」の課題では、タイバ・コスパ偏重の現代社会に鋭く疑問を呈する作品が多く、好ましく読んだ。その中で日垣朋果さんの論文は、効率や正解では測れない感性の豊かさを肯定するため、想像力や他者との対話を促す「余白」の価値を再評価し、「わかりやすさ」と

の共存を提唱する意欲作であった。

満場一致で小泉信三賞に相応しいとの支持を得たのが、間山遼太郎さんの論考である。自らのディスレクシアの経験を例に、「わかりやすさ」の議論を教育現場での公平性という具体的な領域にまで深化させた点が秀逸であった。福澤が説いた「学ぶ機会の平等」を、学ぶ方法の多様性を含めた現代的な「平等」へと読み替え、その重要性を主張する、今日的な教育倫理の視点を含む力作であった。

全体を通して、引用文献の多用、やや古い論点や根拠、ユニークなタイトルと論旨のずれなど、いくつかの懸念も見受けられた。特に根拠となる文献は、その正確性と吟味を徹底する必要がある。

小泉信三賞が求める本質は、文献などの裏付けを持ちながらも、単なる知識の羅列に終わらせない、高校生ならではの感性と既成概念にとらわれない視点にあると考える。次代を担う皆さんには、課題を内省し、既成の答えではなく自らの言葉で、現代社会に対する生の提言を発信してくれることを心から願う。

未来を切り開く、自立した精神の提言者たれ。

AI時代の

良い書き手とは

小西^{こにし}祥文^{よしみ}

(慶應義塾大学経済学部教授)

「良い書き手とは何か？」

今年で審査員四年目となり、いよいよ最後の務めとなる。例年、受賞者との懇談の場で、必ずといってよいほど話題となるのが、この問いである。

「視点や主張の斬新さや面白さ、論理性と客観性、読みやすさ、十分な知識と教養に裏付けされた文章、そして何より、読み手を飽きさせないこと」。

良い文章（＝書き手）の要素だけを抽出すれば、このように列挙できるだろう。しかし、賞の候補に挙がるような小論文はいずれも、多かれ少なかれ、これらの要素を満たしている。同じように優れた小論文であっても、一方は受賞作品となり、他方は惜しくも選に漏れてしまう。審査員の好みの問題もあるが、それだけではない。受賞作品は、異なる好みを持つ審査員が一樣に推すことが多いからである。決定打となるのは何だろうか？

受賞作品からは、今という時代に対する何らかの新しい気づき（メッセージ）が鮮明に立ち上がってくるものである。実は、経済学の研究論文に關しても似たことが言われている。著名な研究論文は、言われなければ分からないが、言われてみると納得するような新たな経済原理や現象を明らかにしたものが多い。この「してやられた感」のようなものが、我々が感じる良い書き手の正体なのかも知れない。

しかし、AIが驚異的に発達しつつある今日、異なる価値基準を模索していく必要があるかも知れない。少し前まで「AIでは難しい」と言われていた高度な推論や抽象的・創造的な思考・創作が可能となったばかりか、個性や人格までも模倣するようになり、あたかも「人」であるかのように成長していく。全く専門知を持たずとも、AIを「訓練」するだけで、一般的な大学生の能力を遥かに超える論文が書けてしまう。このような社会では、「新しさ」の価値が大きく変わってしまう。なぜAIではなく「人」が書くべきなのか？ 「人」だからこそ提供できる「新しさ」とは何なのか？ 「人」である我々が「自ら経験し、感じ、

その体験をもとに自ら考える」ことの価値が問われる社会になっている。

小泉信三賞を受賞した間山遼太郎さんは、ディスレクシアの実体験から、「学びの方法の多様性」の大切さを説く。次席の明楽和磨さんは、AI社会を「全知の無知」の到来と捉え、その対抗手段として「人権の物語性」について考えていく。安藤千紘さんは、国際的な環境問題の解決の糸口として、「わたしの集合体」こそが訴え先として重要であると主張する。原夏希さんは、SNS時代の社会的意思決定における「熟議」の意義を問い直し、建設的な方策を提案する。日垣朋果さんは、舞台衣装の製作者としての体験から、伝える側の視点から「わかりやすさ」の意味を問う。坂城高さんは、スピードと効率性を重視しすぎる現代社会へのアンチテーゼとして、「問」を倫理的に重視する仕組みを模索する。竹縄智さんは、ロシア音楽をテーマとして音楽と政治の歴史を紐解きつつ、文化・芸術を全ての人が等しく享受できる世の中を展望する。AI時代における良い書き手とは何か——いずれも、そのヒントとなる良作揃いであった。

人生に勝つ

たにぐち かずひろ
谷口和弘

(慶應義塾大学商学部教授)

実は、この選評のタイトルは、「名人芸」(羽生善治)に支えられた「史上最強の棋士」(米長邦雄)として知られる大山康晴十五世名人が一九七二年に発表した著書から借用したものである。大山名人のこの著書には、「経営の神様」として知られる松下幸之助(バナンニクホールディングス創業者、PHP研究所創設者、松下政経塾塾主)から推薦の言葉が寄せられた。そのなかで松下は、名人の条件についてふれた。

すなわち、名人になるには、勝負に強いとか、技術がすぐれているといったことにとどまらず、独特な人生観とそこから湧き出る叡知が必要なのだ、と。

最近、ゼミの学生をはじめ塾生の皆さんから、「タイパ」(タイムパフォーマンス)の略)や「ガクチカ」(学生時代に力を入れたこと)の略)などといった略語を聞

く機会が増えた、と感じる。彼らにしてみれば、ムダを徹底的に排除し、効率よく物事をすすめる、あるいは時間をかけずに問題を解決することが、正しい価値観——「正義」なのだろう。そして、「第五〇回小泉信三賞全国高校生小論文コンテスト」に応募した高校生の皆さんも、そうした正義を支持するのではないだろうか。

だが、論文を執筆する際には、テーマを選んだ理由はもとより、テーマにかんする基本的な疑問とでもいえるべきモチベーションが重要な意味をもつ。あるいは、皆さんにとっては、「モチベ」という略語を用いたほうがなじみ深いと思われるので、言い換えるとしよう。問題は、独特なモチベはその醸成に時間がかかるため、効率重視やタイパ重視でたどりつけるものではないという点にある。つまり、若さゆえの経験、葛藤、苦悩、内省、そして逡巡などといったムダが、独特なモチベを育ててくれるのである。

今回も、高校生特有の若い感性にもとづいた力強い主張を展開している多くの作品群に出会うことができ、とてもうれしく感じた。記念すべき小泉信三賞に輝

いたのは、自分を一つの事例として深掘りし、周囲の人々に支えられながら制度に挑戦していく様子を客観的に描いた問山論文であった。また、次席に選出された明楽論文は、AIと人権について丹念に論じ、人間本性にかんする理解を試みた。さらに、佳作として選ばれたのは、地球市民の観点から環境問題を扱った安藤論文、SNSと熟議の関係性にふれた原論文、わかりやすさをわかりにくさの観点から論じた日垣論文、現代の加速社会に正面から挑んだ坂論文、そしてロシア史における音楽と政治の連関性を論じた竹縄論文だった。

総じて今回の応募論文について述べる、タイトルに凝りすぎてモチベがわかりにくい作品が散見された点、そして引用や形式に注力するあまり自由闊達な展開ができていない作品が散見された点を指摘しておきたい。

「人生に勝つ」。皆さんには、このことを肝に銘じ、ムダを楽しみ、自分なりのモチベにたどりつき、そして独特な人生観とそこから湧き出る叡知を大切にできるような名人になるべく、大いに成長してほしい。

小泉信三賞選評

干戈倥傯

はやかわ
早川 浩 ひろし

(株式会社早川書房代表取締役)
会長・慶應義塾理事

小学校三、四年の児童たちが「戦争は自分たちの国が平和になるためにやっているの? 人殺しは悪くてなぜ戦争はいいの?」と話すのを耳にした。私はなんと言ったらよいのか困惑した。素朴な疑問ながら、大人でも返答に窮する難問だ。さて、今年で記念の五〇回を迎えた小泉信三賞は、自由課題が新たに出题されたので今まで以上に応募が増えた。ご同慶の至り。まずは入選枠が三作から五作に増やされた佳作から。

安藤千紘さんの論文は、温暖化や海洋汚染などの地球規模の環境問題への取り組みが停滞するなかで、「わたし」という小さな個人の集合体で取り組む強い意志と大きな可能性を感じさせる、力強い論文である。

佳作入選二作目の坂綾高さんは、人道的に熟されたバナナは腐敗も早いという

譬えから、「効率と速度」が進歩の指標となる現代社会への警鐘を鳴らすのは見事である。結論に至る過程をもう少し丁寧に積み上げていけばさらに良くなったであろう。

三作目、竹縄智さんの作品はウクライナ侵攻以後に見られるロシア音楽忌避の動きを、「音楽」「プロバガンダ」「ロシア政治体制」という三つの観点から分析した論考。目の付け所がよく、思考の深さもうかがえる論文だ。

四作目の原夏希さんは、「SNSは選挙において有権者の参加を促進すると同時に、熟議の機会を妨害している」との仮説を、二〇二五年の参議院選挙を例に取って検証する。若い世代が選挙や政治を真剣に考えていることに頼もしさを感じた作品だった。

佳作の五作目、日垣朋果さんは、「わかりやすさ」だけを絶対視する社会は窮屈で、「わかりにくさ」こそが人の感性や想像力に訴えかけると論じる。抽象論ではなく、舞台衣装作りという筆者の実体験が書かれており説得力がある。

次席は明樂和磨さんの論文。人権を守るためには、「間違ふことへの恐怖」か

ら逃れ、人間の知は常に未完であると自覚して、思考と対話を繰り返すべきであるとの主張に成る程と思う。しっかりと文章力と論法の進め方に感心した。

栄えある小泉信三賞の栄冠は間山遼太郎さんの論文に輝いた。文字の読み書きに困難を抱える障害、ディスレクシアの当事者としての苦悩から出発し、自身の体験を通して挑戦と成長の過程を丁寧に綴るとともに、社会を変えるための具体的な取り組みにまで言及している。「わかりやすさ」という言葉が誰にとっても、どのような形で実現されるべきかを広い視野から論じている点を高く評価する。

私が生業にしている出版は平和な社会なしでは成り立たない。一人の殺人を追いかけるミステリ小説はその典型だ。何万人、何十万人が殺される戦争が起きている国では読まない。ニューヨーク留学中の六〇年代、ベトナム戦争に派兵される米国の友人がいるなか、自分の選んだ仕事に専念できる幸せを痛感したものだ。冒頭に返るが、戦争は誰が何のためにしているのか? 子どもたちの問いにあなたがた、私たちはどう答えればよいのだろうか?

桃李満門を言祝ぐ

まちだともこ
町田智子

(公益財団法人文字・活字
文化推進機構 専務理事)

第五〇回を迎えた今回は、従来の五つの課題に自由課題を加えた六つのテーマでの選考となった。どれもよく練られ、自らの体験を踏まえた高校生らしい視点が目立ち、より多彩な展開となった。

小泉信三賞を受賞した間山さんの論文は、実体験に基づく内容が心に迫った。自らがデイスレクシアだと知るまでの葛藤、自覚してから学校や社会と向き合い、少しずつ乗り越えていく過程を語る。そこに福澤が『学問のすゝめ』で唱える「学ぶ機会の平等」を一步進め、現代教育では十分条件として、多様な方法を揃え、一人ひとりの力が正しく成果に結びつくように学びの環境を整えることが重要と主張する。それは「特別な便宜」ではなく、公平なスタートラインを保障する行為であると。近年、読書バリアフリーの普及など「読書や学びから誰ひとり取り

残さない社会」の実現が急がれるだけに、この説得力に富む小論文は読み応えがあった。

次席となった明樂さんの論文は「無知の知」を唱えたソクラテスと、二四〇〇年後に生み出されたAIを、「全知の無知」——意味を理解せず、膨大な知識を出力する存在として対比する。アルゴリズムのブラックボックス性によって検証できない中、あたかも無謬であるかのように、その回答を受け入れてしまう人類の危うさ。自らが抱える「対話の疲弊」と「間違ふことの恐怖」から逃れるため、個人の自由と価値の多様性を重んじてきた人々が「面倒なプロセスを省略し、完全で予測可能な答えを、効率的に求める」ことで思考様式そのものを均質化し、効率的なファストフードへと作り替える矛盾に警鐘を鳴らす。

佳作五点のうち、安藤さんは深刻化する環境問題について、自国第一主義の台頭を背景に主権国家と国際社会に主体的な役割を期待できない中、むしろSNSなどで世界を横断してつながる個人とその集合体こそが課題を共有し、「地球市民」として解決に導けると説く。

坂さんは、自らのサッカーでの寮生活の経験などをもとに、速度と効率が進歩の象徴として絶対視される中、立ち止まり、熟考し、感覚を研ぎ澄ます時間の重要性を強調している。

竹縄さんの論文は、ロシア音楽の鑑賞が趣味の自分を出発点として、ウクライナ侵攻で巻き起こったロシア人指揮者や演奏家の排除などをきっかけに、音楽と政治について考えた意欲的論考。

原さんはSNSネイティブ世代の眼を通して、昨夏の参議院議員選挙でのSNSの状況を分析し、「熟識文化」を社会に根付かせることの大切さを指摘した。

日垣さんは自らが舞台衣装を制作する中で経験した「伝えたいこと」と「伝わること」の間の思いがけない隔たりから、「わかりやすさ」の畧と「わかりにくさ」の美学を丁寧に考察している。

本賞は普段長文を書く機会の少ない高校生にとって、大変な経験と推察するが、半世紀にわたり、毎年多くの優れた小論文が寄せられたことを思うと、驚きとともにうれしくも感じる。来年も多くの論考に期待したい。